

サイクロン・シドルによる バングラデシュの高潮災害



河川研究部 海岸研究室 主任研究官 加藤 史訓

2007年11月15日の夜に、バングラデシュ南西部にサイクロン「シドル」が上陸し、死者・行方不明者4千人以上、影響人口890万人の高潮災害が発生した。高潮災害の実態および復旧・復興支援に関するニーズの把握のため、2007年12月8～18日に、JICAの「バングラデシュ国サイクロン災害復興支援ニーズアセスメント調査団」に同行し、死者が特に多かった南西部（図-1）にて現地調査を行った。

被災地は網目のように大小の河川が流れている低平地である。幹線道路は既に通行できる状態になっていたが、ベンガル湾に近づくにつれて倒木の数が増えており、最大約70m/sという強風の威力が窺い知れた。

全国約10,000kmの堤防のうち、367kmが決壊、2,105kmが部分的被害を受けた。写真-1のように、高潮による越流で堤防が侵食された箇所が多数あった。堤防は調査時の水面から3m程度の高さがあり、主にシルト・粘土でできていた。ここではサイクロン来襲時には天端上の越流水深が2m以上だったとの証言が多かった。今回のサイクロンは干潮時に来襲したことを考慮すると、長期的には満潮時の高潮による浸水を防げるように堤防を高くする必要がある。

サイクロン来襲の3日前に出された警報は赤新月社（日本の赤十字社に相当）の4万人のボランティアなどを通じて多くの住民に届き、各地に建てられてきたサイクロンシェルターは多くの住民を収容してその効果を発揮した。高潮でサイクロンシェルターが被災したという話は聞かなかったものの、サイクロンシェルターの収容人数が限られている、避難場所が遠い、家畜

を連れて避難できないなどの理由で避難を断念した人がおり、サイクロンシェルターの増設の要望が多かった。

また、警報軽視の要因の1つとして聞かれたことは、2007年9月12日にバングラデシュで初めて発表された津波警報の「空振り」である。高潮に関する「正常化の偏見」は日本と共通の問題であり、地域別の潮位予測などより細かな情報提供とともに、継続的な防災教育や災害経験の伝承が必要と考える。

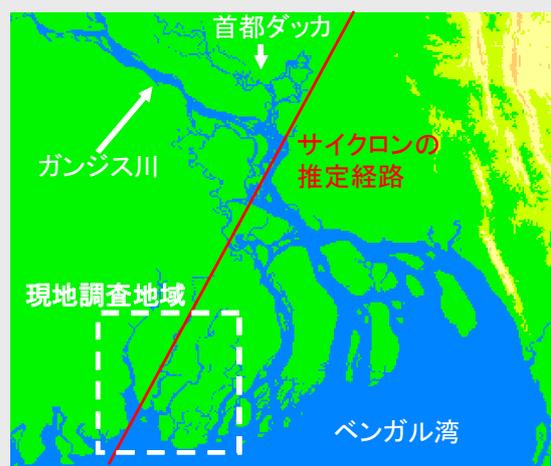


図-1 調査範囲



写真-1 侵食された堤防